

高倉晁



血

闘

史

探偵

軍事

10 セン



2

0055839-000

特 241-333

軍事探偵血闘史

高倉晁・著

東亜書房

昭和 11

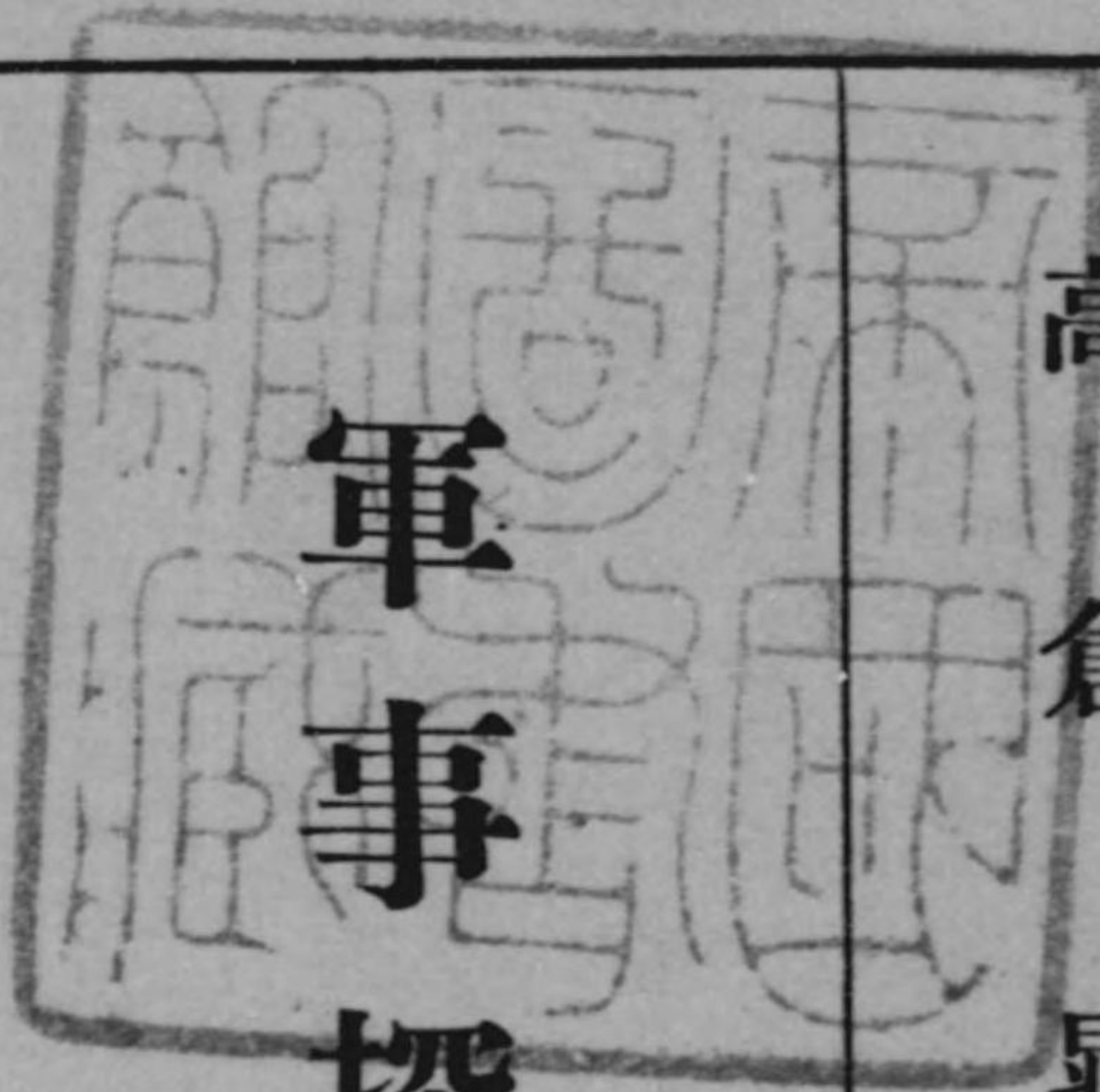
AJB

この著作物は、著作権者不明のため、第67条の規定に基づき、平成12年付けで文化庁長官の裁定を受け使用する

485

特241

333



高
倉
晁
著

軍事探偵血鬪史



東京
東亞書房

序

日露戦役當時、わが國軍の重大秘命を帯びて、敵地深く侵入、花々しき活躍を見せた特別任務隊の功績は、到底筆舌に盡しえない。

全歐の空、東亞の地、戦雲しきりに去來する昨今、一入——死命を賭した彼等の足跡が追憶される。

茲に、密偵苦闘の跡を辿る——、時局混亂の現下、あながち、徒事でもあるまいと思ふ。

切に御高讀を乞ふ次第である。

高 倉 晃 識

目次

一、寒月の乗馬團……………(一)

二、酌む盃の底……………(三)

三、冒険！敵地侵入……………(六)

四、敵のコザツクだ！……………(一一)

五、快漢森田の運命……………(一五)

六、露國軍事裁判係……………(一九)

七、男一疋捨身の度胸……………(二三)

八、なつかしき故郷へ……………(二四)

九、稜々たり日本魂……………(二六)

一、露軍密偵篇……………(二八)

 A 悲壯！密偵志願……………(元)

 C 死の審判に平然……………(三)

 B 怪支那人捕縛……………(三)

 D 無情チバンの落花……………(元)

一、世界密偵綺譚抄……………(四三)

一、寒月の乗馬團

こゝは、清國の首都、北京の街。

晝間、あれほどの喧噪を極める街が、まるで嘘のように、ケロリとして、廢墟も同然の凄い静寂だ。なんといふ、不気味な寂寞だらう。北京の街の深夜は、いま泥のような熟睡に落ちて居た――。

仰げば、中天に凍る利録のような弦月――。

死の街を、颯々として、鋭い風が吹き抜けて行く――。

青い大きな星屑が、瞬間、吹き落されたように見えた。

突如！その死の風景を衝いて――。

古北口へ通ずる道を急ぐ、十二名の乗馬團がある。支那服もあれば、蒙古服、喇嘛僧姿もあるやうだが、別に、夜盗の類とも見えない。が――といつて堅氣な商賣人でもなさうである。寒月の照し出す――肅々として進む一行の風姿には、どこことなく、莊重なものが流れて、馬上

の人の眉宇の間には、深い決意が溢れてゐる——。一癖も二癖もありそんな氣配。いづれにしても、油断のならぬ日付の人物とは思へる。

それも、その筈、この一行こそ、實に、吾が國軍の重大秘命を帯びた、特別任務隊第一班、——横川省三、冲禎介、松崎保一、田村一三、中山直熊、脇光三、伊藤龍太郎、大島與吉、森田兼藏、吉原四郎、若林龍雄、藤田豊三郎の十二烈士。

噫！この寒月の乗馬團こそ、死の街北京を背景にして、今が、その晴れの門出の情景であつたのである。

時！まさに、明治三十七年二月二十二日午後三時。

その目的は、敵中ふかく潜入して、先づ、敵狀視察、鐵道線路や鐵橋の破壊、電線の切斷。その他通信運輸關係の妨害など、など。

壯士、一度去つて亦還らず——。

一じふかく呑む、晴れの決死隊……。

利鎌のような弦月だけが、たゞ癡乎と、段々と小さくなつていく彼等の姿を目送して居た。

二、酌む盃の底

かくて、一行は、萬里の長城にある古北口を通過して、熱河喀喇沁を経て——。

三月上旬。チエンツと呼ぶ、蒙古の一部落に辿りついたのであつた。

此處で、彼等は、しばし、行を進むる準備をととのへた。色々な雜貨物を仕入れた。その中に、携へてきた黄色藥（爆發藥）や、鐵道電線破壊用の器具などを、底ふかく隠した。一行は恰も、蒙古出入りの隊商の如く粧はねばならなかつた。誰が目にももう日本人とは見えない。

「準備全了——、出發すべし」

横川の快聲に、一同は、再び馬上の人となつた。數日後。ターバノシヤンに到着することが出来た。

既に、この地方からは、全くの蒙古氣分で、見渡す限り、原野、また原野。その高漠たる情景は、さすがの烈士の胸を、遠く離れた故國日本へ通はせた。

寂しく沈む夕陽が、また明日は、輝く旭となつて、地平線の彼方から昇つた。そして亦、朱

盆のような大きな夕陽となつて、地平線の彼方へ流れおちた。

原野、また原野。

かういふ事情では、馬ばかりでは、なにかと不便が多いので、更に新しい駱駝六頭を買ひ入れて、これに、荷物全部を積載した。

そして、一行は、ますく奥地ふかく、潜行することになつた。

そして、三月十日。

狼吠ゆる興安嶺の麓に辿りついた。

きて見れば、この地一帯、六尺にあまる大積雪。これには、さすがの勇士達も、ハタと當惑してしまつた。

先づ、第一に、馬や駱駝の食料が缺乏する。次には、寒氣のため、凍傷にかゝりそうだし、従つて、身體が疲勞衰弱してくる。と、いつて、いつまでも、マゴくしてゐるわけにはゆかない。

一同は、鳩首協議の結果、止むなく、二隊に分離することになつた。

一、チチハル方面

横川省三、沖禎介、松崎保一、田村一三、中山直熊、脇光三、他支那人三名。

二、ハイラル方面

伊藤龍太郎、大島與吉、森田兼藏、若林龍雄、吉原四郎、前田豊三郎、他支那人二名。

三、いづれも、雪の少い方面を経て、目的地に一時も早く侵入すること。

四、鐵橋破壊の期を、四月三日に決める。

一同は心ばかりの、袂別の宴を張つた。篝火が、赤々と勇士の頬を照らし出した。酌みかはず酒は少かつたが、盃の底には、千萬言にもまさる、深い意義があつた。各人は、口には云はねど、心の中を、それとなく、目と目で、領き合つた。

そして、それく、西と北に、袂を分つたのである。

しかるに、この日の袂別が、永別の日にならうとは……、命を鴻毛の輕きに置く、烈士の胸中を誰か涙なくして、正視できようか。

三、冒險！ 敵地侵入

横川班と分離した伊藤班は、それから興安嶺を横断して烏珠穆沁の一部落に姿を現はした。そこで、一蒙古王の盡力で、チャンフアーツアイ（張發財）と呼ぶ一人の道案内を備入れ、更に行を續けることになった。

道案内は居ても、なんといつても、人煙稀れな大砂漠地帯。道路があるでもなければ、道案内書や地圖があるわけでもない。

たゞ、便りとするのは、晴夜、爛々と異様な光を放つ北斗星だけだ。それに依つて、方向方位を決めて、奥へくと、進んで行くのであつた。

日は、いたづらに流れて、四月も既に十日となつてしまつた。横川班との約束期も過ぎ去つた。一同は、切齒扼腕して、焦燥してみたが、この、行けども行けども、砂漠の海では、何とも方圖がつかぬ。

此上は、駒の歩みに、運命を賭ける以外、何物もない。一同は、晝夜兼行で行程を、急いだ。

速めた。そして、漸く、到着することのできたのが、ハイラルを距る六十支里「ガンヂユリ廟」に通するといふ、或道路近くの一地點。ところが、さすがの一行も、餘りの強行軍のため、疲勞その極に達し、一先づ、この地點で休養しやうといふことになり、荒茫千里の草野原に、とある窪地を見付け、こゝにテントを張つて、約三日間といふものを、ぶツ通しに、眠りつゞけた。如何に、心身が疲れ切つてゐたかゞ、これに依つて判る。

かくて、疲れも漸く、恢復したので、更に勇氣百倍、十三日の夕刻、いよ／＼目的の地ハイラル近くに、到着することが出来たのである。

噫！ この時の勇士の心中、思つても餘りある。

當時。ハイラルの市街は、新舊二つの市街から成つて居た。

既に、露國の騎兵團は、その兩市街の眼抜きの家屋を盡く專有し、自分の住宅を追ひ出された支那人達は、いづれも市外南方の原野に、テントを張つて、雨露を凌ぐといふ、悲惨な状態にあつた。

従つて、その市街地の警戒は、實に、嚴重を極めて居た。怪しい者は、片つ端しから斬殺、銃殺された。

一行は、ある山の谷間に、根據地を構へた。そして、こゝから、交代で偵察に出掛けることにしたのである。

その山といふのが、大變便利の良い山で、この頂上に登つて見ると、ハルビンに向つて運轉されて行く列車が、いち／＼その箱數まで、數へ上げることができると、明瞭に見え、しかし困つたことがある。それは、肝心の、ハイラルの停車場と、目指す鐵橋とが、家屋の裏に隠れて見えないのだ。

一同は、腕を撫して、首を傾けた。

「こりや、どうあつても、市街に、もぐりこまねばならんぞ。」

「そうだ。停車場と鐵橋の具合を調べねばならん——」

「よし、やらう」

「死は、覺悟の上だ」

「だが、犬死は、つまらん」

「勿論——」

「アハツハ、、、」

「ハツハ、、、」

皆は、聲を合はせて、豪放に大笑した。この肝ツ玉にかゝつたら、ロシアの誇る、騎兵團も堪つたモンぢやない。

翌日。各人は、蒙古人の駱駝曳きに、化けようといふことになり、一同、身體中に、鍋墨を塗り、特にボロ／＼の蒙古服に改めた。どこから見ても、日本人とは思へない。

先づ、一同の中、腕が夜泣きをしてるといふ、吉原四郎が、案内人の張發財を連れて、その瀬踏みをやつてみることにした。

噫！ 冒険きはまる、敵地侵入！ 銃口と劍尖が待つ、ハイラルの街へ。——張發財を旦那役に仕立て、駱駝に乗せ、吉原四郎は、啞の駱駝曳きに化け、いよ／＼、敵地侵入が、敢行されたのである。すると、その結果は、豫想外の好成績だつた。途中、四回も、露軍の警戒兵に訊問されたが、何れも巧みに、云抜けて、逃がれることが出来た。

「おい、案ずるより、生むがやすいぞ」

「ウーム、貴様の度胸が良いからだ」

「おだてるな、俺より、先方が間が抜けてるからだ、ハツハ、、、。」

翌日は、森田兼蔵と若林龍雄が、この大膽不敵な、敵地侵入をやることになつた。しかし、晝間は、それだけ危険率が多いので、夜間を利用しようといふことになり、兩名は、例の張發財を道案内として、それ／＼駒に跨り、鼻唄氣分で、その夜の八時頃、ハイラル市街地近くの松林に辿りつくことができた。

そして、こゝからは、いよ／＼徒歩だ。張發財には、馬の番を頼んでをいて、愈々、目的の鐵橋附近に、潜行することになつたのである。

かくて、午後十一時頃。

市街地の背面にある小高い地點から、周囲の地勢を觀望すると、闇をすかして、街の灯が、チラホラと、恰も天界の星くづのように、瞬いて、しかも、すぐ、一町餘りの眼下には、ハイラル驛の電燈が、あか／＼と點つてゐる。

その近くに、銀蛇のように光つて見えるのが河流である。

「若林、鐵橋は、あの邊だぞ」

森田が指呼する邊り、それらしき影が、河流に跨つてゐる――

「横川たちは、どうしたらうナア」

若林は、フと思ひ出したように云つた。

約束の四月三日はとうに過ぎてゐるのだ。彼等は果して無事でゐるだらうか……。

四、敵のコザツクだ！

星はあるが、月はない。

邊り一面、漆を溶かしたような闇だ。さすがの快男子二人も、氣ばかり焦慮つて、道が一向にはかどらない。

目的の鐵橋は、すぐ間近かに見えては居るのだが――と思つた途端、兩名は、異口同音に、短く叫んだ。

「アツ！」

「し、しまつたツ！」

揃ひもそろつて、深さ胸部に達する泥沼に、躓いてしまつたのである。滅多に、聲を出すわけにもゆかない。迂濶なこをして、線路警戒の露兵にでも發見されたらそれこそ大變である。

「犬死はしてはならぬ」
かねての覺悟が、ハッキリと甦つてきた。と、いつてこのまゝ、泥沼に浸つてゐては、今にも、凍え死んでしまふ。

やつとの努力で、森田は、陸地に這ひ上ることが出來た。

「若林は、一體どうしたのだらう？」

闇をすかしてみるが、別に、その周圍には、それらしい姿も見えぬ。

「變だな」

と思つてゐると、一二町ばかり向ふから、勇しい駒の嘶きが聞えてきた。それも、一頭や二頭ではない。少くとも、十數頭はゐさうである。

「しまった。敵のゴザツクだ！」

反射的に、かう思ふと、彼はガバと、草原の中に、打伏せに腹這つた。じつと眸をこらすと數間先方の闇に、なにか、眞ッ黒い物が、うごめいて行く。

「アツ！ 若林に、ちがひない」

とは、思つても、聲をかけるわけにはゆかぬ。追ひつかうと思ひ、足を速めてはみたが、さ

うかうするうちに、その姿は、何處か搔消すように、見えなくなつてしまつた。それで、止むなくもと來た方に引き返した。

午前二時頃だ、やつと、張發財と馬の待つてゐる松林まで歸つてみると、彼等の影も姿もない。松の梢をわたる風の音が、佗しく迫つて來るのみ――。

「はて、さつきの姿は、たしかに若林だつたらうが……」

しかし、それは、森田の單なる杞憂にすぎなかつた。その若林は、一足先に、危地を逃がれ森田は、捕虜になつたものと思ひ込んで、既に一刻ばかり前に、張發財をつれて彼等の宿營地へむけ、引揚げてしまつてゐたのである。

困つた。路が判らぬ。

さすが豪膽の森田も、全く困り果て、しまつた。とついで、このまゝ犬死はしたくない。

そこで、夜明けを待つて、それと思はれる方角へ向ひ、目茶苦茶に歩き出したのである。しかし、行けども、行けども、涯知れぬ大曠野。腹はへる、咽喉は渴く。仕方なく、殘雪を引ツ掴んでは、口に入れた。

幾里？ 幾十里？

かくて、とつぷりと、日が暮れた。

やがて、また、夜が明けた。

噫！ 何たる武運の拙たなさよ。

その日、はこの地特有の大吹雪。砂を撒くような粉雪が、轟々と渦巻いて、狂ひ乍ら、見る見る萬物を埋めて行く——。一寸先は、白い闇だ。

「いかん、いよ／＼最後がきた。」

森田の全身の力が、ガツクリと抜けた。思はず歩みが止つた。その瞬間、電光の様に閃いたものがある。——尊い使命、重大な責任。

「さうだ。むさ／＼吹雪などに殺されて、たまるものか！」

彼の全身は、火と燃えた。祖國愛こそ、この吹雪の曠野の眞ツ只中で、ともすれば、崩れがちな、彼の全身全靈を鞭撻してくれる唯一のものであつた。足は目茶苦茶に辿つて行く——。と、その時である。

すぐ、前方にあつて、馬の嘶きが聞えて來た。

「おツ！ 馬だ！」

馬がゐるからには、人が居る。

天、吾れを見捨て給はず——。

彼は、その聲、目當てに、まつしぐらに、駈け出したのである。

五、快漢森田の運命

森田が、躍り込んだテントには、見るからに猙獰さうな蒙古人が、防寒衣にくるまつて、眠つて居た。

彼等は、意外な闖入者に、流石に、肝をつぶしたとみえ、傍の同類を、しきりに、ゆり起しながら、その中の一人にむかひ、何やら、口早に、命じたやうである。

森田は、すつかり、度胸をきめて、近くにあつた木箱の上に悠々と、腰を下ろした。

「好きなようにしろ、なんの、蒙古人ぐらゐ……」

彼は、この四名を對手に、一戦を交へても、負けないだけの自信を、十二分に持つて居た。況んや、腰には、まだピストルも持つて居る。

すると、何か命ぜられて居たその一人が、俄かに戸外に跳び出して、馬背に鞍をおくとみえ
金具の音が、聞えてくる。

「はてナ、こいつ等、露軍の手先カナ」

森田の頭に、フツと、こんな豫感が、閃き浮んできた。

「誰かを迎へにゆくらしいぞ。よし。先んずれば、人を制す、こいつア、逃げた方が、得策だぞ！」

森田は、三名の油断を見すまして、バツとばかり、吹雪の中に、跳り出したのである。

「こんな所で、犬死してはならぬ。逃げ得るだけ逃げねばならぬ。」

心は、早れども、残念！ 飢に疲れた、フラ／＼した脚である。それに、ひきかへ、對手は馬。その上、得意の馬上射撃を浴びせかけてくる――。

「無念！」

さすがの森田も、遂に、覺悟をきめた。覺悟をきめると、不思議なもので、頭が氷のやうに透徹してくる。そこで、所持の、ピストルや秘密手帳、その他證據品となるやうな物品を、手早く、積雪に埋めた。

「これでいゝ……」

立上つた時だつた。蒙古人二名が、白雪を蹴散して、駈けつけて來た。

無氣味な銃口が、ツキツケられた。それで、森田は、對手のなすまゝに委せ、再び先刻のテントに、押送されてしまつた。

すると、そこへ、支那語の話せる一人の蒙古人が入つてきて、物凄い形相で訊問を始めた。

「――めめた、もう大丈夫だ、森田は、心中、ペロリと赤い舌を出した。支那語にかけては、天才と云はれた森田であつた。それで、「待つてました」とばかり、「私は林廣徳と呼ぶ、北京の雜貨商であるが、今度の戦争で、一もうけしようと思ふ。當地に視察かた／＼出掛けてきたところ、途中、大吹雪のため、路に迷ひ、その上、乗馬や手荷物一切を失くしてしまつた……」とまことしやかに、空涙さへ湛へて物語ると、

「ホウ、ソレはソレは、氣の毒だ。」

と云つて、却て、大變な同情を寄せてくれることになつた。蒙古人は、割に純情である。

「疲れたらう、食べ物もこゝにある、食べたら次のテントにいつて休んで宜しう。」
快漢森田も、豫期せぬ彼等の親切ぶりに、變な感傷を感じた。

「一切は、皇國のためだ！」

口の中で、強く呟きながら、次のテントに、入つて見ると、思はず、彼の心臓は、ギョツ！と立止つた。

意外にも、そこには、背廣姿の二人の露國人が、焚火に當つて居たではないか。

これには流石の森田も、内心しまつた、と思つたが、別に、さあらぬ體で對手の訊ねるまゝ爲すがまゝに、委せてゐると、身體検査をやつてみても、何等之はと云ふ怪しい物品も持つてゐないので――、

「別に、――日本軍の密偵でも、なさそうだ。單に、舉動不審者として、鐵路交渉局にでも、廻してをけ……」

と、いふことになつたのである。（厄介なことになつたぞ）とは思つてみたが、最早、運を天にまかせた。森田は、彼等の云ふ通り、やがて數名の蒙古人に監視されながら、ハイラル舊市街にある、清國鐵路交渉局に送致されてしまつた。森田の――胸中には、まだまだ輝く希望があつた。（よし、逃亡の機會を狙つてやるぞ。）

六、露國軍事裁判係

鐵路交渉局に於ける取調は、意外に厳しく、迂濶なことをやると、化の皮が脱げ落ちさうである。それで、（これはいかん、よし、こうなる上は、逆に出てやれ！）と決心の腹を極めた森田、自ら進んで、劉局長に會見を申し込んだ。

「捕虜の分際で、生意氣な奴……」

と、泰然と構へて、唇で薄く笑つてゐる局長を、睨みつけて居た森田は、急に破顔一笑、聲を低くして――。

「實は、自分は、日本軍の密偵である！」

と、――今迄の一部始終を、残らず、打明けた。更に、――日露戦争の由來、東洋平和と日支提携の必要なることを、得意の辯舌を以て、滔々と述べて見た。驚いたの、驚かないの――劉局長は、

「ソ、ソ、ソウいふお偉い方でしたか……」

と云つて、その席から飛び下り、俄かに、森田を、その席に推め、自分は、はるか末席に飛び下つて、今までの無禮を謝罪するのであつた。

「劉さん、貴公は、仲々、見識高い博學の方だ」

森田も、お世辭ではなく、かう云つた。

「日本の國士の方に、そう云はれると、私、無上の光榮です。實は、今日にも、こゝを、お逃し、たいのですが、露軍の警戒が、頗る嚴重を極めてゐます。その隙を見出すまで、暫く辛抱して下さい。」

「貴公の御芳志は、この森田、死しても、忘却仕らん」

森田は、感涙を浮べて、じつと眼を伏せた。

翌朝——

「大人、大變です。實は、今朝方の午前二時頃のこと、このハイラルを距る、約九露里の地點で鐵道線路を破壊せんとした、日本密偵があつたとかいふことで、この街の露軍は、今大騒ぎをやつて居ります。」

と、局長の祕書が蒼くなつて、知らせてきた。——この日本密偵こそ、實に森田の同志、伊

藤班の行爲であつたのである。

こんな風で、ハイラルの街の警戒は、愈々、峻烈をきはめ今は、蟻の這ひ出る隙間もないほどの状態となつてきた。

これでは、いかなる森田も、逃げ出せる道理がない。それで、一日と過ぎ、二日と過ぎ、親切な劉局長の手元で、窃かに、その機を狙ひながら、暮らしてゐると、或日のことであつた。

何處で、どう嗅ぎつけたものか、突然、コザツク騎兵數十騎が、この鐵路交渉局官邸に押寄せ遮二無二云はさず、森田を引立て、街の中央にある、露軍囚虜家屋に、監禁してしまつたのである。そして間もなく、ハルビンに護送されることになつた。

もはや、萬事終れり。

なにごとも、絶望である。

どんなに、腕き苦しんでも、鐵檻に入つた猛獸。凡てを、天にまかすより外に手段がない。

快漢森田も、事茲に到つては、今度こそは、觀念の躋を決めた。

死！

たゞ死あるのみ、と。

やがて、彼のために、軍事裁判が開延れた。しかるに、何たる僥倖か、彼には、日本密偵たることを證據立てる、一物の證據品も押収されてゐない。彼を知る生證人が出るか、それとも彼自身が、自ら口を割らない限り、それは、どんなに、露國軍裁判係が、こじつけやうとしても到底駄目なことである。この事を知つてゐるので、森田は、相變らず支那の雜貨商であると言ひ張つて、挺子でも動かないのだ。

七、男一疋捨身の度胸

或日。

監房に、一人の檢察官が、數名の部下を従へて現はれた……。

「おいッ！ 林廣徳！ いくら、貴様が、頑張つたつて、もう、駄目だぞウ。日本軍の密偵で沖、横川といふ男が、貴様をよく知つてゐるといつとるぜツ……」
と、藪から棒。

（噫！ 實に、意外なことを聞くものだ。沖、横川、俺にとつては、一日一刻たりとも、忘れたことのない。懐しい同志の名前ではないか。その、沖、横川の名を、彼等が知つてゐる以上、これは、ひよつとすると、彼等も亦、武運拙く、或は、捕虜となつたのではあるまいか。）流石の森田も、心中、云ひ知れぬ、不安を覚えるのであつた。然し、表面だけは、飽くまでも、冷静を装つて――、

「それが、どうしたといふんですかい？」

と、わざと、空とぼけて訊き返した。

「すぐ、この隣に、捕まつてきてゐるぞ。」

こゝまで、云はれたら、大抵の者なら、顔色を變へて、參つてしまふものだ。

然し、男一疋、捨身の度胸。快漢森田は、既に肝を決めてゐた、何處までも、圖々しく。

「では、その男と、一つ會はせて見て下されば宜いぢやありませんか。」

と切り出した。すると、檢察官は、却つて、狼狽して、

「イ、イヤ、まあ、それ程の必要もあるまい」

といつて、肩を怒らして、引揚げて行つた。

彼等が、こんなカマをかけたも道理。この時には、既に、沖、横川の二烈士は、ハルビン郊

外の露と、消え失せてゐたのである。

かくて、まんまと云ひ逃れた森田は、證據不十分といふことで、純然たる一商人として處置されることになり、六月十五日、他の留置囚人などと一緒にチタに護送されることになつた。

八、なつかしき故郷へ

そして、チタから、更に、イルクーツクへ廻され、つゞいて、トムスクへ押送、こゝに暫く滞在してゐたが、後、河船に移乗されて、オビ河を下り、ベルムに到着した。既にこの時分には、日本人だといふことを感付いて居たものとみえ、その河船には、浦鹽から避難した日本人の男女ばかりが六百名近く、乗込んで居た。ベルムに上陸すると、更に、こゝから三十餘名の日本人男女や鮮人達と一緒に、ライスキーと稱する、一寒村に送られ、こゝで、薪とりや開墾の手助けなどを強制されて、働くことになつた。宿舎は、警察か屯田兵の宿舎とでもいひそうな家屋。食物など、黒パンの粉や水のやうなスープが渡つてゐた。

ところが——或日、突如、嬉しい便りがあつたのである。ベルムにある日本人俱樂部から、

「露土内にある日本人は、全部、内地に送還される豫定なり云々」の報知が達した。一同は、手の舞ひ、足の踏むところを知らない——。

そして、數日の後。

一行は、愈々、歸國の途に上ることゝなつた。集合地カザンに集つたもの、實に八百餘名。やがて、彼等は、露獨國境から、長距離鐵道を驅つて、一路ブレイメン港へ向ふことになつた。その送中、ブルリン驛頭では、時の駐獨公使井上勝氏他在留日本人多數が、手にく、日章旗を携へて、賑かに、出迎へ、且つ、見送つてくれた。

ブレイメン港から、一同は、ウイルハット號に乗組み、その年の七月二十四日この港を抜錨した、スエズ運河から、シンガポール、香港を経て、一気に長崎へ向つたのである。

快漢森田の心中、舷窓から覗く、異郷の夕燒空を見る度に、思ひは遠く、同志の上に、飛ぶのであつた。

沖、横川は？ 盟友伊藤班の行動は？

二月二十二日。

北京出發當時から、蒙古服を着たきり雀で、しかも、辨髮姿なので、船内の同胞達は、彼を

大變奇異の眼を以て迎へて居た。

誰か知る——、日本軍密偵として彼の臥薪嘗膽の血闘を。一介の薄汚い辨髪男が、國軍の裏面にあつて、皇國のため活躍したなぞとは、船中一同、夢にも思はぬ。

かくて、十二月六日。

ウイルハット號は、無事、長崎に入港。

一同は、漸くなつかしい故國の黒土を、踏むことが出来たのである。

九、稜々たり日本魂

快男子、森田兼藏は、一回の蹉跌ぐらゐで、意氣沮喪するような、そんな意氣地なしではなかつた。

その五體には、稜々たる日本魂が、躍動して居た、炎のように、祖國愛が燃えて居た。それで、上陸するや否や、直ちに、北京公使館付武官室宛に打電して、その進退の指令を待つことにした。武官室では、青木少將（後の中將）や佐藤副官（後の少將）はじめ、森田は、既に、

國難に殉じたものとして、彼の沖、横川二烈士同様、既に靖國神社へ合祀の手續がすまされてゐた折柄とて、その無事なる報告を見るや、いやもう、大變な欣び、早速、渡支するやうに、返電を發したのである。

——七度び、生れ變りて、皇國のために、つくさむ。森田の心境は、正しく、この文字通りであつた。

「今度こそ、この森田が、日本人らしい、大仕事をしてみせるぞ！」

彼は、胸の中で、かう絶叫しながら、その月の二十日、再び門司から便船に依り、秦皇島に上陸。越えて、三十八年一月四日。

その雄姿を、なつかしき北京公使館青木宣純少將の面前に、現はしたのである。

そして、その翌月の二月中旬から、彼は、井戸川班の部將として、再び、滿洲の原野に飛躍することになつた。

井戸川班とは、いはゆる李得勝こと井戸川辰三少佐（後の中將）の率ゐる、蒙古馬賊隊のことだ。そこには、彼がハイラルで別れた若林龍雄が、やはり部將として、働いて居たのである。その他、松岡勝彦、村岡政二など、天晴れ、一騎當千の武夫が——。

日露戦役當時。

この井戸川班の功績は、今更ら、こゝに喋々するまでもなく、あまりにも、有名である。噫皇軍の裏面にかくれて、花々しき活躍を見せた、特別任務隊。筆者はこゝに、快漢森田兼藏を主として描いたが、特別任務隊、悪戦苦闘の足跡は、既に十分に判つて頂けたことと思ふ。ハルビン郊外、莞爾として散つた、沖、横川二烈士の事は、餘りにも宣傳されてゐるので、こゝには、故意に省略した。讀者の御諒解を求めておく――。

一、露軍密偵篇

日露戦役裏面秘史としては、尙、數々の物語がある。今度は、敗戦國ロシアに、視點を移そう。

ロシアにも、やはり、日本國民に劣らぬ、忠君愛國の熱血漢は居た。それなのに、敗戦であつたが爲に、彼等の忠勇無双が、空しく、地中に埋まつて、今日に至るも、尙傳へられぬもの

が甚だ多いのは、寔に遺憾である。

筆者こゝに書く、「無名勇士」の健氣な最後を、誰が、涙なくして、讀むことが出来ようか。以上、序詞のつもりで――。

A 悲壯！ 密偵志願

明治三十七年九月二十七日。

露曆に直せば、九月十四日。

遼陽の激戦で、惨敗の悲境を喫した、露軍第五師團第七十一旅團チエンバルスキー第二百八十四聯隊では、後退また後退をつゞけねばならなかつた。

これは、決して、彼等の云ふ、――豫定の退却ではなかつた。

そして、遂に、烟臺停車場を去る、西北數十露里の地點に、最後の陣地を構築して、日本軍に對する、逆襲計畫を熱心に樹てゝゐた。

そして、その結果。

日本軍右翼の陣地、配兵、員數などを偵察しやうと、云ふことになり、聯隊長は直ちに、こ

れが、密偵の人選を命じたのである。しかし、浮腫立つた露軍の中に、この大冒険をやらうといふやうな、そんな勇敢な兵士などは、一人もゐない。

聯隊長はじめ、幹部將校は、いづれも、カン／＼になつて、部下の不甲斐なさを憤激してゐた時、豫備兵卒ワシリヤポフと稱する男が、敢然、進み出てきた。

「その任務は、私に命じて下さい」

聯隊長は、どんな男だらうと眺めてみると、三十三歳だといつてゐるが、中肉中背の、熟れかといへば、ロシア兵の中では、小男の部類。しかも、毛ぶかい露兵には、稀に見るやうな颯爽たる美男子である。

「貴様が、この大任を、果たさうといふのか」

對手が餘りに、華奢な男なので、聯隊長も、幾分、軽くあしらつてゐる。

「左様でいます。一死を賭して、この名譽を果したいと思ひます。」

その容姿に似氣なく、リヤポフの言葉は、凛として鋭い、その眉宇には、普通の露兵には、一寸、求められない精悍な光芒と、嚴然たる決意の色が閃いて居た。

至誠のあふるゝ所、岩石も徹る。

露軍將兵とても、眞紅の血の通ふ人間である。聯隊長は、この勇敢な部下の態度を見ては、自ら、眼頭を熱くした。

「では、お前に、この名譽ある大任を命ずることにする。それに就いて、一寸、貴様に訊ねるが、貴様の出生地は、どこだ？」

かう、やさしく、訊ねながら、聯隊長は、彼の手を、強くつよく、握りしめた。

「私の出生地は、ペンゼンスキー縣ペンゼンスキー郡、レベチヨフカ村でありますツ！」

「そして、郷里には、妻子があるか？」

「はッ。妻と二人の子供がありますツ！」

「……………」

聯隊長は、何か云ひたげに、暫し、その唇を、もぐ／＼させてゐたが、やがて、そのまゝ黙り込んで、更らに、その手を、強くつよく、握りしめていくのであつた。

敗軍の悲しみ、意氣地ない部下。

あゝ、不甲斐ない露軍の中にも、こんな偉い男が居てくれるのか——。こんな兵士が、一箇聯隊でもゐてくれやうものなら、いくら武勇絶倫の日本軍であらうとても、こうムザ／＼と負

け續けてのみは、おなからうものを。

聯隊長は、聲をあげて、泣きたいほど、嬉しかつた。

「では、訣別の乾杯をしよう。」

銀盆にのせた、二つのカップ。

カップが、カチリと、觸れ合つた。

「聯隊長の御健闘をいのります。」

「ウーム、貴様の成功をいのるぞ」

四つの眼が、千萬の感激を秘めて、空間に、カチリと、交叉した。

「では、行け！」

「はッ！」

去り行く、その健氣にも雄々しき、後姿に、聯隊長はじめ、幹部將校は、直立不動！ 全露軍を代表して、敬禮を行つた。何れもの、擧手の指先が、肩が、細かく、震へて居た——。

B 怪支那人捕縛

今や、露軍全線の運命は、白面の青年リヤボフの双肩に、かけられて居た。

リヤボフは、支那人の農夫に、變装して、その夜から直ちに、日本軍の陣地ふかく紛れ込んだ——。

配兵、員數、武器、地形などを、巧みに、調査しては、之をいち／＼支那服の襟裏にかくしてあるノートに記入した。更らに、地圖は、支那靴の底に秘め、翌二十八日の如きは、白晝悠々として、日本の嚴重な警戒哨をくゞり抜けて、二十九日の夕刻までには、既に、戦線一局面の機密を、すつかり嗅ぎ出してしまつたのである。

そこで、いよいよ、その本隊に、引揚げる可く、通過しようとした地點こそは、——吾軍の右翼、第一軍第十二師團の一部隊が、宿營する烟臺炭坑北方の附近一帯であつた。

時、まさに、九月二十九日の黄昏時。我陣營では、それ／＼に、夕餉の仕度に忙しい時分であつた。吾軍の一兵士が、水汲みに行かうと思ひ、とある森かけを、民家の方へ急いでゐると折良く、そこに通り合せたのが、一人の支那人農夫。高粱刈入れの歸途とみえて、刈鎌を肩に支那笠をかぶつて居る。

「您呀——！」

と、呼びかけながら、

「給我喝水拿來……」

俺に、飲料水を持つて来てくれ、といふ意味を、とても、滑稽極る、出鱈目な支那語で、話しかけて行くと、相手の支那人農夫。横着千萬にも、そのまま、その場から、突如！駈け出してしまつたのである。

「こいつ、可怪しいぞー」

と思つたので、その兵士も、すぐさま、彼の跡を追ッ駈けた。

「こら、待てッ！」

その聲に、近くの森かげから、数名の同僚達が、

「どうしたんだッ！」

「何か、やつたんかいッ？」

と、口々に、騒ぎ立てながら、飛び出してきた。

「彼奴が、怪しいんだッ。露探かも知れんぞ」

「なにッ！ 露探！」

そういへば、慾深い支那土民どもが、よく露軍に買収されて、吾軍陣地の情況偵察に、潜入してくるので、さては、此奴めツと思つた吾軍兵士達は、

「ソレツ！ 逃がすな」

と、ばかり、一同、ぐんぐんと、その後を追ッ駈けて行く。

さう、かうする中に、最初の一兵士が、漸く追ひ着いて、農夫の襟首に、將に手を觸れんとするや、對手は、俄然立直つて、手にした刈鎌を振上げながら、目茶苦茶に打つてかゝつてくる。しかし、勇敢無双の吾兵士、それ位のことには、ヘコタレはせぬ。瞬く間に、相手の刈鎌を叩き落して、その場に、引ッ捕へてみると、途端、ポロリと、落した支那笠。見て驚いた、支那人に非ず、紅毛碧眼の露兵の顔だ。

「おゝ、まさしく、敵のスパイだ！」

さすが、物に動ぜぬ兵士も、これには、思はず、叫ばすには居れなかつた。

そこへ、同僚達も、漸く駈けつけてきて、相手の露兵を、後手に縛り上げ、宿營地に、引き揚げることになつた。思ひ設けぬ、大得物に口々に、凱歌をあげながら、やがて、宿營地に引き揚げることになつた。

その途中、相手の露兵はといへば、唇を眞一文字にかみしめたまゝ、何等悪びれたところもなく、その態度は、敵ながら、實に天晴れなるものがあつた。

九月とは、いへど、滿洲の秋は早く、吹く風は、蕭瑟として冷い。

C 死の審判に平然

わが、第十二師團司令部に於ては、直ちに、その夜、師團長井上光中將や、參謀長小原傳大佐などが協議の上、審判長（判士長）として、參謀福原鉞太郎少佐、審判官（判士）濱面又助大尉、同審判官生井耕鐵氏（法務官として従軍）を任命、直ちに、捕はれた露軍密偵に對する取調を開始することになつた。

リヤポフは、既に、ノートや機密地圖を、證據品として押收されてゐるので、審判長からの訊問に對しても、別に、何等包み隠すところもなく、むしろ露軍密偵であることを、自ら、昂然と申述べて行つたのである。

その態度、その音調、實に悠揚迫らざるもの——噫！これが、死の審判に立つ者と、誰が思へよう。これには、流石の審判長や審判官、傍聽席に在る吾軍將校團なども、舌をまいて讚嘆

したといふ。

「敵ながら、殺すに惜しい奴だ」

「露軍中にも、こんな勇士が居たのか」

一同、しきりに、目と目で感心し合つて居た——。然りと雖、軍規は、嚴として、犯すべからず。

翌三十日。

再び公判は開かれ、審判長福原少佐は、やがて除るに、その判決文を、讀み上げて行く。（以下原文のまゝ。）

x

判 決 書

露西亞國ベンゼンスキー縣ベンゼンスキー郡レベチヨフカ村住

第五師團第七十一旅團チェンバールスキー第二百八十四聯隊獵隊豫備兵

ワシリー・リヤポフ

當三十三年

右者我軍の配備を探知する目的を以て支那農民に扮装して明治三十七年九月二十七日以來清國奉天省烟臺停車場を経て東南の方向に進み我前哨線内に入りて動靜配備を探查しつゝありしは間諜の行爲にして其現行中に捕獲されたる者とす依て正規の審判を経たる未判決する事左の如し。

リヤポフを死刑に處す

明治三十七年九月三十日

於清國奉天省チパン

審判長 第十二師團參謀陸軍歩兵少佐

福原 鉞 太郎

審判官 第十二師團參謀陸軍歩兵大尉

濱 面 又 助

審判官 第十二師團理事

生 井 耕 鐵

リヤポフは、肅然と首垂れて、聞いて居たが、審判長が讀み終ると、靜かに、目禮した。福

原少佐の眼にも、複雑な感情が、燃えて居る。

D 無情チパンの落花

露軍きつての快男子リヤポフは、いよ／＼、銃殺と決定したのである。

かくて、時刻は迫る、その日の午後六時。

滿洲の秋いよ／＼濃か、無常の風に誘はれる病葉が、雨のように降り注いだ。

烈士リヤポフは、所刑執行主任官藤谷憲兵中尉の指揮に従ひ、刑場たるチパンの谷間、一本の楡の樹の根元に案内されてきた。

立會人として、福原少佐や濱面大尉、生井耕鐵氏や軍醫官なども出場して居る。

たそがれ迫る、大空の彼方に、紫色の雲が流れて行く——、その方向は、彼のなつかしいレベチヨフカ村の方であつた。

やがて、定刻はきた。

リヤポフは、泰然として、所定の場所に着き、暫く、天帝を祈り微笑を湛えながら、銃口の迫るのを待つことになつた。

すると、審判官、濱面大尉は、つか／＼と、彼の面前に進み出て、

「貴様には、妻子があるか」

とたづねた。

「はいッ！ 妻と二人の子供があります。」

リヤボフは、平然として、答へるのであつた。しかし、眼はたそがれ空を行く遠い雲を見つめて居た。

——レベチヨフカの郷里に残してゐる妻子の姿が、胸中に、アリ／＼と甦つてきた。と同時に、九月二十七日、出發の夕べ、この濱面大尉と、同じことを訊ねてくれた、尊敬する聯隊長の面影が、ホンの一瞬間ではあつたが、瞳の裏に閃いた。

濱面大尉の眼に、薄く涙が光つた。

武士は、相見互ひだ。戦場にある身なれば、いつの日亦、自分も、彼と同じ位置に立たないと云ひ切れよう。

「貴様は、ロシア帝國の軍人中、最大の名譽と勇氣とを、所持するものである。殊に、露帝に對しては、唯一無二の大忠臣であると信ずる。その點、本官としても、實に、多大の同情と敬

意を惜しまないものである。しかし、軍規は、嚴かにして犯すべからず、貴様は、今、その軍規に照らして、此處で、處罰されねばならない。それで、若しも、貴様の郷里に残してある妻子に對し、何か云ひ遺しておきたいことでもあれば、遠慮なく申述べるが宜い。本官は、如何なる支障を排しても、その貴様の意志を、十分、傳へることに努力してあげたいと思ふ。」

大尉の、親切な言葉に、流石のリヤボフも、感激の極に達した。

ハラ／＼と、熱淚が、双頬を流れ落ちた。

「——遠慮はいらん。なんなりと、甲置くが宜いぞ」

「大尉殿、お志は、まことに、有難うございますが、この期になつては、別に、妻子に遺言などの必要もないやうに思ひます。」

かう、健氣にいつて、その濡れた臉が、やがて、朗かな微笑に崩れて行く。そして、

「大尉殿、では、これで。」

といひ乍ら、差出した右手。——永別の握手だ。——二人の力が、強くつよく、握りしめられて行く——、勇士の胸中は、勇士のみが知る。

たそがれの空は、今を最後と、血のような残紅にもえて居る。
やがて、白布の眼隠しがされた。

檜の樹の眼元に、端然と立つてゐる、一世の快男子リヤポフ。

射撃兵五名が、そこから、約五十歩ぐらゐの所に、整列して銃をかまへた。
刻、分、秒……。

所刑執行官藤谷憲兵中尉の軍刀が、サツと、銀蛇のように、空に躍つた。

その一瞬間！

「射ていッ！」

力強い命令一下！

轟然たる一齊射撃！

×

かくて、ワシリイ・リヤポフは、吾軍將兵の賞讃の的となりながら、壯烈悲壯な最後を遂げたのであつた。

チバンの谷——草地のかけ。

その草地こそは、無名勇士の永遠に眠る天國である。

ワシリイ・リヤポフこそは、我忠烈の士、沖禎介にも比肩すべきロシアの誇る忠臣であらう。

一、世界密偵綺譚抄

さて、本章に於ては、日露戦役軍事探偵秘話から、廣く世界のスパイ網に視野を三轉する。

スパイは、云ふまでもなく、生命懸けの大仕事である。

命を惜しむ者には、斷じて出来ない。敵地ふかく潜人すれば、明日の日——否、一分先が、闇である。いつ、どこから、銃弾が、匕首が、飛んで来ぬとも限らない。

多くのスパイが、突如！何者かの兇手によつて、惨殺される、しかし加害者は、常に、杳として、不明の場合が多い。

姿なき加害者。

風の如く現はれ、風の如く去る——。

スパイの危険は、敵に正體を見破られることばかりではない。味方から、「裏切りだ」の「漏洩」だのと云つた怖ろしい嫌疑を受けること、これが、最もスパイ自身にとつて警戒すべき危険であらう。

その悲惨の程度に於ては、後者の方が、はるかに、深刻なものがある。何故なら、敵の手にかゝつてなら、たとへ如何なる極刑に處されとも、祖國では、「護國の鬼」として、永久に、尊敬されること、勿論であらう。

だが、「賣國奴」の罪名の下に、われと我祖國の手にかゝつたのでは、未來永劫に、浮び上ることは出来ない。

こゝに、各種の――

世界のスパイ綺譚を抄して、その例を拾つて見よう。

x

スパイの上には、男女の差別なく、絶えず、彼の祖國の眼が光つて居る。彼が敵國の首都で自分の樹てた赫々たる偉勳に陶醉しきつてゐる瞬間でも、突如として、冷たい祖國の斷頭機の刃が、彼の首根つ子へどさりと落ちかゝつてこないとも限らない。

スパイは、職能に熟達するにつれて、次第に機微に通じてくる。

自分が、派遣されてゐる國の機密に通ずると共に、自國のスパイ組織や軍備の樂屋裏を知り過ぎてくる。そこへ第三國の魔手がのびて、彼が、祖國から貰つてゐる給與の幾十倍に當る報酬を以て誘つたとしたら、どうであらう。たとへ、彼自身は、そんな誘惑に微動だもしなかつたとしても、疑り深い祖國の當事者は、最早そのまゝには、放置しない。

たとへ、祖國に對して、裏切りをせずとも、職務怠慢と見られたり、大きな失策をしたりしたらもうスパイの生涯は、それで、終りである。それは實に絶對にして、峻嚴なものである。

マチルデ・ブルムと云ふ女は、祖國から支給された莫大な機密費で英國に土地まで買ひ込み全く居心地のよい他國で平和な餘生を送らうとしたがやがて或時、ロンドンの場末のアパートで咽喉を搔つ切られて死んで居た。

アブラハム・メルコヴィツチ、これは、男だが、彼は「定住スパイ」として、數年間、パリに滞在してゐたが、どう魔がさしたのか、自國の軍機をフランス側へ洩らしてしまつた。さてそのことは勿論すぐ、祖國に、嗅ぎつけられてしまつた。それから程なく、メルゴヴィツ

チは、ボアー・ド・ブローロンの暖昧屋で、兩端に柄のついた銅線で絞殺されてゐたといふことである。

グレーテ・ナツシーといふ女は、奥國の老帝フランツ・ヨーゼフ陛下とうまく近付きになり、その居城のシェーンブルン城の奥深く閨房の人となつた。勿論、帝は、この新しく得た愛妾が他國の廻し者だとは、知る由もなかつた。グレーテは、この老帝の身邊から、様々な祕密を引つ張り出して、祖國へ通報し、當局者を狂喜させた。グレーテが始終寫し取つてゐた軍事上の機密書類の中には、祖國にとつては、餘り益がないが、同じヨーロッパの某國にとつては、實に重大な價值のあるものも、あつたのである。

しつかり者である、グレーテも、慾には眼が眩んだものか、その機密書類の寫しを、右の某國の大官に、眼が飛び出すほど高價に賣りつけた。その金で、彼女は、風光明媚の地中海の海岸ニースに廣大な地所付きの邸宅を求め、そこへ引き移つて、出るにも入るにも、すこぶる華麗を極めた二頭立ての馬車や、王候を凌ぐやうな特別談への自動車を驅つて、全ニースの人々を羨望させたりしたものであつた。

ところが一夜。彼女の自動車は、思ひも寄らぬ人為的な障害にぶつかつて、彼女も、遊車手も見るも無惨な最後をとけてしまつた。

x

以上の例は、いづれも、「祖國が遣はした監視スパイ」の魔手にかゝつた犠牲だと云へよう。

外國のスパイ小説の形容詞ではないが、「スパイは、いついかなる處にも、この監視スパイの隼の如き眼と、前後左右からピストルや匕首や毒藥の瓶をつきつけられてゐる形」なのである。

讀者は、スパイと書くと、すぐに間諜マタ・ハリを脚色したデイトリツヒの「間諜號X27號」ガルボの「マタ・ハリ」を想起されるであらう。女スパイ史上の妖花、マタ・ハリについては餘りに宣傳されつくして居る。それは、何れ他の機會に譲るとして、彼の一世の風雲兒大ナポレオンをして、嘆せしめたものゝ中にも——イギリス美人のスパイ網があつた程である。

世界大戦中に、いはゆる濁流の藻屑と消え失せた殉國者の實例は、餘りにも數多いであらうそれを詳細に、探し求めるならば、全く收拾もつき難い事かも知れない。

閑話休題——本篇にあつては日露戦役裏面に躍つた、兩國の軍事探偵血闘史を主眼とした。筆を擱くに當り、國難に殉じた英靈に、瞑目、合掌するものである。(終)

今評判の東亞書房の十銭文庫

海南隱士著	覺悟せよ！次の大戦争	定價十銭	(送料二銭)
藤原連策著	支那は動く	定價十銭	(送料二銭)
国際研究會著	日本の財政・何年戦争に堪えられるか	定價十銭	(送料二銭)
沼上良太郎著	必ずあたる新商賣往來	定價十銭	(送料二銭)
山門王吉著	一讀鬼氣！妖奇怪談集	定價十銭	(送料二銭)
白木屋事務	立身出世虎の巻	定價十銭	(送料二銭)
山田忍三述	財閥功罪史	定價十銭	(送料二銭)
太田義孝著	世界珍奇怪見世物	定價十銭	(送料二銭)
奈緒願著	極東の今日戦争か平和か	定價十銭	(送料二銭)
黒田正隆著	明世界の	定價十銭	(送料二銭)
海南隱士著	戦線に躍る日英米の勝敗	定價十銭	(送料二銭)
岡山啓之助著	東日と讀賣の暗闘	定價十銭	(送料二銭)
城南山人著	二・二六事件真相の真相	定價十銭	(送料二銭)
東亞書房編	誰にも出来る貯金法五十種	定價十銭	(送料二銭)
川上康吉著	財づる物語り	定價十銭	(送料二銭)
内藤伸二著		定價十銭	(送料二銭)

發行所 東京芝区三田四町二番六 東亞書房

御注文は 代金引替は御容教を 切手代用は二割増に

五島富士夫著	二・二六事件の記録	定價十銭	(送料二銭)
海南隱士著	組閣の真相 廣田内閣はどうなる	定價十銭	(送料二銭)
秋月正雄著	千波萬瀾の生涯・人間高橋是清	定價十銭	(送料二銭)
齋藤一耶著	遺囑した内大臣 齋藤實とはどんな人か	定價十銭	(送料二銭)
頭山滿翁述	重大國事の秘密を語る	定價十銭	(送料二銭)
村田和雄著	歐洲の風雲・世界大戦は起るか	定價十銭	(送料二銭)
五島富士夫著	國際珍聞奇聞集	定價十銭	(送料二銭)
滿蒙事報社編	謎の秘境・蒙古の全貌	定價十銭	(送料二銭)
秋本孝雄著	若返り法とホルモンの話	定價十銭	(送料二銭)
山門王吉著	實話讀物・職業人純情集	定價十銭	(送料二銭)
斯波雪夫著	國際情緒・ハルビン物語	定價十銭	(送料二銭)
片山哲平著	映畫スタア千夜一夜	定價十銭	(送料二銭)
山門王吉著	戰術奥の奥・外交は是て行け	定價十銭	(送料二銭)
加藤弘一著	空の爆彈・護れ祖國日本	定價十銭	(送料二銭)
奈緒願著	時代の爆彈・護れ祖國日本	定價十銭	(送料二銭)
須山滿洲男著	世間の裏をのぞく 風雲を孕む外蒙古	定價十銭	(送料二銭)

發行所 東京芝区三田四町二番六 東亞書房

早おく求め 全書書店で販賣し居りす 下さ い

吉岡義一 著	非常時日本の外交陣	定價十錢 (送料二錢)
高倉晃 著	逆巻く太平洋	定價十錢 (送料二錢)
小牧琢磨 著	財界巨星出世譚	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉 著	怪奇犯罪實話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房 編輯	見よ! 此躍進日本の姿	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房 編輯	常識讀本・人生百課事典	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉 著	明朗爆笑大會	定價十錢 (送料二錢)
牧山允 著	女スバイの暗躍	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄 著	要領百パーセント戦法	定價十錢 (送料二錢)
中村武郎 著	東西偉人逸話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房 編輯	皇國軍人に戀ふ	定價十錢 (送料二錢)
陸軍中將 堀内文次郎閣下 述	大西郷を語る	定價十錢 (送料二錢)
箱館小史 著	百年後の人種戦争	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順 著	政界財界膝栗毛	定價十錢 (送料二錢)
黒田正隆 著	世界の景氣は何時爆發するか	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四町二番六 東亞書房

讀書界の人も東亞書房の十錢本

野村繁 著	横から見た華族生活	定價十錢 (送料二錢)
森本澄夫 著	社會常識讀本	定價十錢 (送料二錢)
大澤光幾 著	西園寺公望	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄 著	列國は日本をどう見る	定價十錢 (送料二錢)
田淵茂 著	靈界物語	定價十錢 (送料二錢)
南城政夫 著	税金から見た長者番附	定價十錢 (送料二錢)
高倉晃 著	斷乎戦ふべし	定價十錢 (送料二錢)
城北隱士 著	昭和快傑傳	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順 著	世界の謎	定價十錢 (送料二錢)
森村辰雄 著	無産黨は何處迄伸びるか	定價十錢 (送料二錢)
小谷乘仙 著	現代佛教は何處へゆく	定價十錢 (送料二錢)
國際研究會 編	膨脹日本の異變	定價十錢 (送料二錢)
太田義孝 著	郷誠之助の正體	定價十錢 (送料二錢)
藤原達策 著	現代親分乾分物語	定價十錢 (送料二錢)
時田英雄 著	宇宙及生物その起源と終滅	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四町二番六 東亞書房

339
1162

滿蒙事報社編 定價五十錢 (送料五錢)

滿洲 官費 給費 學校案内

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料三錢)

小資本で 出來る 滿洲の職業 百五十種調べ

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)
人を求むる新大陸は招く

滿洲の就職手引き

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)

蒙古の全貌

謎の内蒙古
秘境外蒙古

軍事探偵血闘史

〔定價十錢〕

昭和十一年十月十五日印刷
昭和十一年十月十七日發行

著者 高倉 晃

發行者 角田 恒

印刷所 玄眞社

不許複製

東京市芝區三田四國町二六

發行所 東亞書房

振替東京八八三八〇番
電話 三田 三九八九番

Printed in Japan



東京

東亞書房

發行